

付録 I 雑誌『数学』原稿の作り方

I. 原稿について

1. 本誌の原稿は、日本語で作成の上、以下にお送り下さい。

〒 110-0016 東京都台東区台東 1-34-8

日本数学会『数学』編集部

2. 原稿は、なるべく $\text{T}_\text{E}\text{X}$ を用いて作成して下さい。
『数学』のスタイルファイルが数学会のホームページからダウンロードできますので、ご利用下さい。

3. 原稿は、編集部宛に紙原稿でお送り下さい。 $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で原稿を作成された方はファイルを編集長宛 email でお送り下さるようお願い致します。可能であれば、PDF またはポストスクリプト・ファイルもお送り下さい。

4. 原稿を送付される際、著者の連絡先を明記して下さい。

5. 著者校正は初校に限りますので、入念に行ってください。

II. 体裁など

1. $\text{T}_\text{E}\text{X}$ 以外のワードプロセッサなどを用いる場合は、1 行 44 字詰 28 行にし、行間の空白は十分にとって下さい。

2. 章、節、定義、定理、系、例、注意などは、番号または適当な標題をつけ、系統だてて配列して下さい。引用文献、注などは体裁を整えて、文末に一括して並べ、脚注を用いることはさけるようにして下さい。

3. 改行はなるべく少なくして下さい。

4. 本文は漢字まじり平仮名を用い、句読点は、(コンマ)。(ピリオド)を用いて下さい。また、引用符は「」ではなく、‘ ’を用いて下さい。

5. 外国人の人名はアルファベットによる元の綴りを使って下さい。ロシア語の人名などは English equivalent を用いてもかまいません。外国語のままの述語は、原則として、元の綴りを用いることとしますが、以下の例のように慣用的に片仮名書きをされる述語は仮名書きでもかまいません。

コンパクト イdealル モジyラー
モーメント ノルム ポテンシャル
スカラー スペクトル テンソル
ユニタリ ベクトル 等

6. 引用文献の書き方については、付録 II 論文作成の手引の I.9 にしたがって下さい。また、雑誌名の略記については、Mathematical Reviews になっていて下さい。

7. 数式、記号、文字指定、図、表については、付録 II 論文作成の手引の II にしたがって下さい。

III. 『数学』投稿案内

『数学』では、原稿は基本的に依頼稿ですが、「寄稿」欄への投稿を歓迎しています。「寄稿」は広い範囲の読者に興味をもってもらえるようなオリジナルな小篇、よく知られた定理の面白い別証明、不親切な証明のギャップをうめてわかりやすくしたものなどを希望します。また、問題の提起、以前に掲載された問題への解答なども歓迎いたします。長さはおよそ 5000 字以内です。原稿は『数学』のスタイルファイルを用いて $\text{T}_\text{E}\text{X}$ で作成して下さい。なお、「寄稿」欄への投稿は、日本数学会の会員に限りますのでご了承ください。

付録 II 学会欧文誌 ‘Journal of the Mathematical Society of Japan’ 投稿規定

本誌は数学における研究論文を掲載する。毎年 1 巻を発行する。1 巻は 4 号から成る。

I. 原稿について

1. 本誌に投稿する原稿は、英語、仏語または独語で書くこと。原稿はコピー共合計 3 部を下記宛送付するか、または、pdf ファイルあるいは ps ファイルを `jmsj (at) math.or.jp` に送付すること。

〒110-0016 東京都台東区台東 1-34-8

日本数学会 Journal 編集部

2. 著者は原稿の完全なコピーを保有しておくこと。
3. 本文前に英語の **Abstract** を書くこと。ただし、Abstract 内には数学記号や公式等はできるだけ避けること。また、文献表からの番号のみの参照もできるだけ避けること。
4. 1 ページ目の脚注に **2000 Mathematics Subject Classification** (参照: <http://www.ams.org/msc>) による分類番号と **Key Words and Phrases** をつけること。ただし、第 1 分類番号 (Primary) は唯一にすること。
5. 60 文字以内のランニングヘッドを 1 ページ右上余白に明記すること。
6. 原稿は原則として $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ($\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 等) で作成すること。(手書きの原稿は原則として受け付けられません。)
7. 著者の連絡先を明記すること。また、共著の場合には校正刷送付先一箇所を指定すること。
8. 投稿論文は、原則として返却いたしません。

II. 付記

1. 査読の便宜のため、論文中に引用されている未発表文献で重要なもののコピーも原稿に添えて提出すること。
2. $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ で原稿を作成した著者は、掲載決定時に紙で出力した原稿と完全に同一の $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ ファイルを提出すること。
3. 連絡先の変更は速やかに通知すること。
4. 著者校正は一度だけなので、遺漏なく校正すること。字句の添削、変更はできるだけ避けること。
5. 校正刷返送の際に別刷の希望部数を指定すること。最初の 100 部は無償であるが、これを超える分は 50 部を単位とし有償で受け付ける。表紙はつけない。

参考：論文作成の手引

論文の全体的な構成に注意を払い、読者に読み易いように工夫すること。特に Introduction を活用して、この中で論文の主要な結論を紹介し、既知の事柄との関連を簡潔に述べること。外国語を十分に推敲すること。

I. 論文の構成および原稿の作成について

1. 原稿は A4 判 (ヨコ約 210mm, タテ約 297mm) の用紙を用い、プリンターまたはタイプライターによって印字したものを原則とする。 $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ などのソフトを用いて原稿を作成する場合には、行間をあまり詰めすぎないこと。

上下左右 3cm の余白を残すこと。

2. 論文を構成する章 (CHAPTER), 節 (SECTION), 定理 (THEOREM), 補題 (LEMMA), 系 (COROLLARY), 定義 (DEFINITION), 例 (EXAMPLE), 注意 (REMARK) などに適当な番号や標題をつけて系統だったものにする

こと。

3. 各段落のはじめは改行字下げをすること。定理、証明、定義等は上下半行ずつあけること。

4. 数式は独立したものか文中に挿入するものかをはっきりさせ、独立した式の上は半行ずつあけること。

5. 改行の際は必ず行頭を数文字下げること。ただし、行頭を下げずに改行する場合は明示すること。
6. 見出し語の体裁などは最近の本誌掲載論文にならうこと。論文の標題、節の題は太字を用い、英仏語の場合は最初の文字のみ大文字とする。著者名は姓名ともに省略せず書く。住所は論文の最後に書くこと。
7. THEOREM, LEMMA, PROOF 等は太字とせず、小キャピタルを用いる。証明の終わりを□で示すこと。
8. 文中の語は省略形 (Th., Cor., w. r. t., LHS, RHS など) を用いず、完全な形で書くこと。数式内で exp, sin, log, lim, max, Im, deg, Ker, Aut, Sign, Ext などの記号を用いるときは立体にすること。
9. 参考文献は体裁をととのえて、本文の後にまとめて示すこと。一論文中原則として通し番号とし、[1], [2], … のような番号を付すこと。この他、[M] 等のキー表示を用いても良い。TeX などのソフトで参考文献を作成する場合には、活字を小さくし過ぎないこと。

引用論文については掲載雑誌の巻、年号、頁まで引用すること。雑誌名の略し方は Mathematical Reviews 巻末、あるいは、<http://www.ams.org/msnhtml/serials.pdf> の略号表にならうこと。たとえば Journal of the Mathematical Society of Japan を J. Math. Soc. Japan と略す。単行本の場合は、著者、書名(シリーズ名、巻数)、発行所、発行都市名、年号の順とする。

文献の表記例

References (あるいは Bibliography)

- [1] K. Yosida, On the differentiability and the representation of one-parameter semi-group of linear operators, J. Math. Soc. Japan, **1** (1948), 15–21.
- [2] T. Kobayashi, Discrete decomposability of the restriction of $A_q(\lambda)$ with respect to reductive subgroups. Part II, Micro-local analysis and asymptotic K -support, Ann. of Math., **147** (1998), 709–729.
- [3] T. Kobayashi, K. Ono and T. Sunada, Periodic Schrödinger operators on a manifold, Forum Math., **1** (1989), 69–79.
- [4] I. Satake, Algebraic Structures of Symmetric Domains, Publ. Math. Soc. Japan, **14**, Iwanami Shoten, Tokyo; Princeton University Press, Princeton, N.J., 1980.
- [5] D. A. Vogan, Jr., A Langlands classification for unitary representations, In: Analysis on Homogeneous Spaces and Representation Theory of Lie Groups, Okayama-Kyoto, 1997, (eds. T. Kobayashi, M. Kashiwara, T. Matsuki, K. Nishiyama and T. Oshima), Adv. Stud. Pure Math., **26**, Math. Soc. Japan, 2000, pp. 299–324.
- 本文中では Satake [4], Vogan [5], あるいは [4], [5] というように引用する。
10. 脚注を用いる場合は、文中で対応する語の右肩に 1), 2), … のような番号を付すこと。脚注より、注 (REMARK) として文末にまとめて記す方が望ましい。

II. 数式, 記号, 文字指定について

1. 複雑な記号はできるだけ避けること。たとえば、作字した文字、標準的でない文字、極端に小さい上ツキや下ツキの文字、多重根号などである。

2. 数式はなるべく行の幅が広がらないようにすること。

3. 上ツキ (下ツキ) の添え字に複雑なものあるいは上下の幅の広いものを用いないよう、たとえば、

$$\exp\left(\int f(x)dx\right) \text{ や } x^{[m/n]}$$

と表記するなどの工夫をすること。

4. 記号としての下線 (lim など) の使用は組版上の指定と紛らわしいのでなるべく避け、やむを得ず用いるときは特に明記すること。

5. 図、表は原稿中に挿入希望場所をはっきりさせること。図は丁寧に明瞭に書くこと。必要があれば、余白に細部についての説明を加え、線の太さ (太, 中, 細) も指定すること。

6. 原稿を TeX で作成していない場合には、2 部のうち 1 部にギリシャ文字, ドイツ文字, スクリプト文字, ボールド文字をはじめとして、その他の特殊記号等を指定しておくこと。

ギリシャ文字	青丸で囲む。
ドイツ文字	赤丸で囲む。
スクリプト文字	緑丸で囲む。
ボールド文字	赤波線の下線。
立体	赤い四角で囲む。

7. 原稿を $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ で作成していない場合には, 下記のような紛らわしい文字や記号の区別をはっきりさせ, 赤で説明を加えること.

1 と l , 0 (ゼロ) と O , \cup と U , \vee と V , \wedge と Λ , \emptyset (空集合) と ϕ , \in と ε , x と \times (かける記号), Δ と \triangle (ラプラシアンなど), \backslash (商などに用いる斜線) と \setminus (差の意味の斜線), 下ツキ添え字の 0 と O と o など.

III. 参考文献

- [1] 相川弘明, How to write mathematics in $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ I, II, 数学, **45** (1993), 76–83, 164–171.
- [2] 小林昭七, 数学論文の書き方 (英語編), 数学, **39** (1987), 349–354.
- [3] 丸山正樹, $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 入力についての注意, 代数幾何学シンポジウム講演記録 (東北大学), 1996, 169–175.
- [4] 野水克己, 数学論文のための英語案内, サイエンス社, 1993.
- [5] 小田忠雄, 数学の常識・非常識 — 由緒正しい $\text{T}_{\text{E}}\text{X}$ 入力法, 数学通信, **4**, No.1, (1999), 95–112.
- [6] The Chicago manual of style, Univ. of Chicago Press, 14th ed., 1993.